



TITLE:

<大會抄録>ジャワの共同占有の解
體をめぐって

AUTHOR(S):

植村, 泰夫

CITATION:

植村, 泰夫. <大會抄録>ジャワの共同占有の解體をめぐって. 東洋史研究
1979, 38(3): 483-483

ISSUE DATE:

1979-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153745>

RIGHT:

ジャワの共同占有の解體をめぐる

植村泰夫

十九世紀後半、ジャワにおける土地所有の「轉換」問題は、極めて重要な統治上の問題であった。オランダ政廳は、中部ジャワ一帯に廣範に存在する共同占有を世襲的個人占有へと「轉換」させるべく、様々な努力を行なったのであるが、結果的にはあまり成果を上げえなかったと言われる。

この問題については、十九世紀後半以來、多くの議論があるが、その論點はほぼ「轉換」が順調でなかった原因の解明に集中している。

ただ、この時期のこの問題に關する史料を検討してみると、たしかに個人占有デサの數はほとんど變化していないが、もう一方で土地割替を實施するデサの數が減少しているという特色がみられる。このことは、「轉換」にまでは至らなかったにしても、この時期に共同體的規制が弛緩して農民の土地所有權が次第に確立してゆく傾向を示しているよう。

この報告では、從來、あまり評價されてこなかったこの點に注目し、その要因を検討するとともに、以上の點をふまえて「轉換」失敗の理由として從來あげられてきた論點を再検討してみたい。併せ

て、共同占有解體の展望を考察してみたい。

業食佃力考

濱島敦俊

明末の江南デルタの農村に生じた土地所有構造ならびに社會構造の變化に伴って、從來は郷居地主の掌握の下に、里甲制を軸に遂行されていた圩田水利（排水Ⅱ大朋車、ならびに圩岸・塘浦の濬築）をめぐる社會的諸關係が解體したことはすでに確認されたところである。ここに生じた水利の場の空白が、佃戸自身地の縁的結合によつて自生的に填められたとは考え難い。この空白に起因する水利の荒廢に對して、嘉靖期以降、公權力の介入が目立ち始め、萬曆年間に到つてその傾向は顯著となる。そこで設定される水利規範が、鄉紳的土地所有に照應する、水利の新たな社會的關係を創り出したのである。

これらの新しい水利規範に共通する骨格は、所有田土の面積に比例して勞役と費用を負担する。照田派役、及び照田派役に際して、鄉紳層の免役特權を認めない優免限制の二點にあるが、その具體的實施法として、業食佃力が一般に登場する。ところで、現實の勞働を、佃戸層に提供させ、それに見合う米・錢を地主が支給する方法は、用語としては、周蔭吉之氏の研究に紹介されており、すでに宋代に既出のものである。

この報告では、まず明末以降の業食佃力の具體的實施手續について若干の考察を行いたい。續いて、耿橘（十七世紀初頭）、陳繼儒